

考古学から見た播磨町の遺跡や出土品など、文化財のよもやま話をお届けします。

播磨町 むかし昔

その十一 新しい「大中遺跡像」

大中遺跡が国の史跡に指定されてから、半世紀になろうとしています。その間、特に平成に入ってから兵庫県教育委員会の発掘調査で、大中遺跡のイメージが大きく変わってきました。史跡指定の頃は、「米作りが定着するとともに村は安定して大きくなり、農閑期には蛸壺漁たこつぼりうをするなど平和な村だった」という遺跡像でした。

大きな変化の1つ目は、考古学の進歩（土器分類の研究）に伴って、大中遺跡の年代比定が弥生時代後期から弥生終末〜古墳時代初頭へと、新しくなってきたことです。年代が変わり、特に弥生時代と古墳時代の境目は、邪馬台国女王卑弥呼が中国（魏）と国交を開いた時代（3世紀の中頃）と重なります。

室町幕府の後、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康が戦国時代を終わらせた

ように、卑弥呼の年代も倭国統一のための戦いの時代だったのです。その証拠は、発掘調査で見えられた大半の竪穴住居跡が、土器も持ち出せずに焼け落ちていたことです。考古学では失火か戦いの結果なのかを明らかにできませんが、時代背景を考えると火の不始末で数軒が焼けたのではなく、戦いで村全体が焼き討ちされたと見るべきでしょう。

また、遺跡の立地が洪積台地の先端部（播磨町では一番の高地）にあり、周囲は自然の濠（旧流路）に囲まれた要塞だったこと、そして卑弥呼と同様に祭りの道具を銅鐸どうたたくから銅鏡にいち早く変更した、先進的な村だったことも見えてきました。

2つ目は、水田跡が発見できないことです。去年から今年にかけて、遺跡周辺の水田が予想される狸狐ヶ池付近

【問合せ】 播磨町郷土資料館 学芸員 大平 茂
☎ 079 (435) 5000



大中遺跡出土砥石・鉄製品と
採集褐鉄鉱

や、南の大中一丁目下水道工事を実施していることで、この立ち合いを願いました。しかし、古くは低湿地だったと確認できたのですが、水田の畦畔はんがなぜか見つきりません。大中では、水稲耕作が主産業でなかったのです。

米に代わるものづくりが何なのかを考えると、竪穴住居跡から発見された多量の砥石とぎしが、簡単な鉄器生産を想像させてくれます。この原料として、禹余糧うりようたかしこぞう・高師小僧たかしこぞうと呼ばれる褐鉄鉱を想定しました。遺跡周辺では、海上がりものを含めよく採集されています。今後、これを利用した鉄器生産が可能かどうか、検討していきたいと思っています。

町の人口 1月1日現在

住民基本台帳人口（ ）は前月比
34,778人(+7人) 男…16,999人(-10人) 世帯数…14,421世帯(+11世帯)
女…17,779人(+17人)

